

大相撲

元立行司・
36代木村庄之助

山崎敏廣氏

『行司さんのちよつといい話』

平成29年
8月29日(火)
10:00~12:00

本学M棟さくらホール

日時

場所

受講費用

定員

1,000円

300名 (先着順)

元立行司・36代木村庄之助

山崎 敏廣 (68) ①

人生の贈りもの わたしの半生

新横綱稀勢の里関は7年前の九州場所での白鵬関の64連勝を阻みました。当時は立行司・式守伊之助。土俵下に控えて大一番を見届けたそうなんです。稀勢の里関の顔がだんだん紅潮して、「立ち合いまでは五分。絶対対面負けしないぞ」という闘志を感じました。内に秘めたものをね。でも、あの勢いだと言葉は、双葉山関の9連勝を簡単に抜くだろうと思っていましたから、まさか倒すとは。すごい力士が出てきたな、と思いましたね。双葉山関の連勝を止めた安芸ノ海関も横綱になっていますし、不思議な巡り合いです。

横綱に昇進する日本出身力士の一番手に、稀勢の里関を挙げたに聞いています。自分の形にハマッたら、すごく強いじゃないですか。ひとくは闘志むき出しの顔をして、観音様みたいな顔になっちゃう。大丈夫かなと思っちゃう。土俵上では、ふてぶてしい印象もありますけど、大関になってからも向こうから挨拶してくれるし、言葉遣いも丁寧だし、礼儀正しい好青年ですよ。一日も休まず、行司生活50年。裁いた取組は本場所だけでも4410番にのぼります。なぜ行司に？

私の郷里、鹿児島島の枕崎出身の元力士が「行司のなり手がないう。中学3年ぐらいの子はいないか」と。井筒部屋にいたその元力士の後援者とうちの両親が知り合いで、私の知らないうち場所が進んでいたんです。九州場所のあと鹿児島巡業があつて連れていかれました。「鶴ヶ嶺関に会わせてあげる」と言われてね。元関脇逆鉾の井筒親方や元関脇寺尾の銀山親方のお父さんです。鹿児島出身の英雄でしたから、ワクワクですよ。相撲は好きだったわけだから。相撲が行司の控室に通されて、同じ井筒部屋の式守勘太夫さんから「行司になる気はないか」。私は「警察官になりたいです」ときっぱり断りました。

東京オリンピック前年の1963年12月のことですね。実は面接試験だったとか。私の師匠となる勘太夫、のちの26代木村庄之助親方は「立行司になったら親方と呼ばれるんですが」「芯がしっかりしてる。合格」と言ったと、帰りの車の中で聞かれました。父親は「行っていい」ですよ。稀古は荒い。「一応ごねたんでしめしめ」と思っていたら、年が明けやすく、朝礼のときに全校生徒の前に引張り出されて、校長が「3年11組の山崎敏廣君は大相撲の行司として修業に入ります。上京しますから応援しましょう。仲立ちしてくれました元力士が学校や教育委員会まで話を通して。」「事ここに至っては行かざるを得ないなあ」と覚悟しました。

(聞き手・田中啓介) 全10回 やまさき・としひろ 1948年生まれ。64年入門、井筒部屋に所属、式守敏廣の名で初土俵。85年十兩格、95年幕内格、2006年三役格に昇格。08年に38代式守伊之助、11年に36代木村庄之助を襲名した。13年定年退職。著書に「大相撲 行司さんのちよつといい話」。

胸元の菊綴と軍配の房緒は木村庄之助だけに許される総紫。「横綱が一番強い力士が就く地位。日本人でなければ、とは思いません」
—東京都江戸川区、飯塚悟撮影

芯の強さ気に入られ 土俵裁いた50年

<朝日新聞 2017年2月6日夕刊>

※新聞記事・本は、いずれも発行所及び講演者より許諾を得ています。